

課題解決に向けた行動計画

名古屋市立大学病院

2022年度
第2回地域緩和ケア連携調整員研修（ベーシックコース）

【チームメンバー】

参加施設・所属	氏名（職種）
名古屋市立大学病院	内田 恵（医師）
	古川 陽介（看護師）
	伊藤 麻子（看護師）
	鬼塚 真実（看護師）
	飯田 萌子（薬剤師）
	佐藤 顕世（MSW）

① 選定した地域の課題

- ・ 顔の見える関係作りが難しい
- ・ バッグベッド
- ・ 幅広い地域からの患者を受け入れている（大学病院という性質上か）
- ・ 地域連携が院内で介入する時期、地域に帰す時期
- ・ 遠方の施設からの入院患者、地域に戻るときの社会資源の把握が難しい
- ・ 在宅側のタイミングと病院側のタイミングが一致しない
- ・ 院内での体制は整っているが、地域との関係づくりや、顔の見える連携、ニーズに応えているか
- ・ 病院近隣の地域との連携の課題は何か。
- ・ 当院の場所の関係や地域の事業所数も充実しており、受け皿は十分にある中で、どう地域連携を構築していくか
- ・ 身寄りのない方の退院支援、地域に戻る際の支援をどのように体制作りをしていくか。
- ・ がん拠点病院として、当院主催で会を開催したりすることができていない
- ・ 入院→外来支援 外来での意思決定支援ができていない中で、サポートセンターへ依頼がくる
- ・ 緩和ケアチームが介入したときに、今後の療養先に関する情報提供の方法
地域と情報共有ができることで、病院での看取りを減らせるのではないか

② どんな地域を目指すのか→

★患者さんが希望する療養先で療養できる★

- ・ 身近な地域でできること
- ・ がん拠点病院としてやらなければいけないこと
- ・ 院内の支援の質を高めることと、院外との支援の質を高めること
- ・ 外来での意思決定支援 呼吸器内科の外来で緩和ケアチームの同席
- ・ 地域の訪問看護ステーションとの症例検討の開催→地域にそのようなニーズがあるか。
- ・ 病状の受け止めや話し合いを大事にしたいが、主治医の方針によってうまくいかないこともある
- ・ 治療中から在宅の支援を介入させていったらいいのではないか。
- ・ シームレスな支援、もっと早い時期に地域と連携できるのではないか。
- ・ 主治医から早い時期に話がでてきているか否かで緩和ケアの関わり方が変わってくるのではないか。

③ 目指す地域を実現するために取り組むべきこと

患者さんが希望する療養先で療養できる体制づくり

- 患者の状態に合わせてシームレスな支援を目指す
- 在宅での緩和ケアの質を高めて苦痛が少なく在宅療養を目指す
- 自宅で看取ることができる地域作り

④ 具体的な行動計画と ⑤ 目標達成時期

地域連携と看護学部との共同で訪問看護向けの交流会の開催

名刺交換も含めて顔合わせ後、訪問看護の学習ニーズを拾うことを目標とする。

主催：看護実践センター（副看護部長参加）

緩和ケアチームメンバーは交流会に参加

時期：2023年 秋頃(土曜日午後2-3時間)に開催予定

開催方法：ハイブリッドの予定。

がん診療連携拠点病院として緩和ケア部主催の交流会やオープンカンファレンス開催

地域の在宅医療従事者(職種問わず)の様々なニーズの把握を目標に交流会を開催、そのニーズを反映したオープンカンファレンスや研修会などを後日開催することを計画する。具体的な開催方法は今後緩和ケア部で検討していく。

時期：交流会 2023.7.15 第一会議室

オープンカンファレンス - 11月頃 西部・東部医療Cと共催